

新 1 年生の光と影（その 2）

榎場 雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

春らんまんの入学式。新 1 年生の晴れがましい喜びは、言うまでもありませんが、同時に、微妙に揺れ動く不安にも似た複雑な心情は、小学生だけのものではありません。

◎ こんな日に新入生は嬉しからむ 手に上着持ち 校庭を歩む

永田 紅「ぼんやりしているうちに」

新しい制服の上着を手に、ワイシャツ姿で独り校庭を歩いている新中学生の姿が目には浮かびます。春の陽射しの注ぐ校庭を、心弾む思いで歩きながら、ふと独りぼっちの不安を搔き立てられるような、複雑な思いが伝わってきます。同時に「嬉しからむ」と詠みあげ、我が子の姿を目の当たりにした、母親の深い思いもじんわりと伝わってきます。

入学式から 1 カ月、新 1 年生も学校生活にも慣れてきたと思われる頃、憧れていた中学野球部の新部員の C 君のお母さんから、部活動に悩む子を思う母親の切なる相談がありました。

今春、中学生になった長男は、3 歳の頃から野球が大好きでプラスチックのバットを振りまわし、遊んでいました。小学生になると、父親も本気になって指導し、本人もこれに応じて 3 年生からは、地域の少年野球チームに入り、5 年生になると、すでにチームのエースとして活躍していました。中学は、中高一貫の野球の盛んな私立に進ませてやりたかったのですが、父親の仕事が不安定で、現在は契約社員として、某食品会社のクレームの受付係として勤めています。当然のことながら、収入も不安定で、6 年を通し私立に通わせることは望むべくもありません。せめてもの親心として、市内では野球部の部活が盛んな市立 D 校へ越境入学させました。ところが、その D 校の野球部では、新入部員は、毎日が球拾いばかりとのことで、息子はすっかり腐ってしまって、勉強もおろそかになってしまっています。学校側の説明では、それが D 校野球部の、伝来の決まりだとのことです。

小学生の頃は、野球でどんなに疲れていても、眠いまなこをこすりつつも、宿題だけはやり遂げ、翌朝になって、大あわてで時間割をそろえて、朝練にも、遅れずに駆け足で登校する毎日でした。そんな息子の姿は、おかしくもあり、頼もしいとさえ思っていました。その息子の余りに消極的な態度がもどかしく、心配でたまりません。これに対し、父親は「本人がやる気があるか否かだろう。私事で学校にクレームをつけるわけにはいかないよ」と言います。もっともなこととは思いますが、自分のことを責められるのが嫌で、逃げているように思うこともあります。私の僻みでしょうか。息子のことも然る事ながら、親として私のあり方について教えてください。と謙虚な相談でした。

お話を聴きして、「C 家には誰ひとり困った人はいない」と思いました。息子さんにしても、ご主人にしても、そしてお母さんにしても、今、ご自分が抱えている問題に真正面から向き合っています。このことこそ「プラス発想」として、肩の力を抜いてください、と伝えると、お母さんは、ふーっと一息入れ、「もう 1 度、電話します」と言い、第一幕の幕引きとなりました。

それから2時間後、お母さんから2度目の電話が入りました。それは第2幕の幕開けでした。最近、「プラス発想」という言葉をよく耳にしますが、それをわが身の上に置いて言われても、実感がわきません。具体的に教えてください、という訴えでした。

実は、私も「プラス発想」という言葉が、いつ、どこで、誰が言い出したのか、よく知りません。けれど、多くの人がいろいろな場所で、いろいろな機会に、「前向きにものごとを考える大切さ」を説き、「プラス思考」と表現しています。しかし、語源的なことについては説明されていません。

私の実体験の上から確信となっている「プラス発想」とは、生活の中で、どんな小さなことでも、実質的に「プラス」と思われる言動について、現在完了的に、「それは確かなことだ」と確認することに始まる考えのことだと思います。それは生き方を楽にしてくれ、心を温かくしてくれます。

Cさんのお宅に当てはめて考えてみると、息子さんは球拾いの毎日であっても、幼いころからの野球への夢を捨てきれないからこそ、「やめる」とは言いません。ご主人は、正社員に伍して仕事を全うしておられます。まさに「プラス行為」ではないでしょうか。そして、お母さん。家族のことで、いろいろ気がかりなことがありながら、親として、妻として、どうすればよいのか？ ふたりの気持ちに思いやりながら、ご自分の心のうちにもしっかり目を向け、第三者の意見を求めて、相談してくださいました。それは、立派な「プラス発想」だと思います。そう、「がんばってね」「もう少しの辛抱よ」などの励ましの言葉をかけがちなところでしょうが、それは、いま陥っている状態、いわば現在完了的にマイナス面を認める表現になりかねません。

「これからのことを前むきに考える」というのは、そこに問題があると思います。と伝えました。

Cお母さんは、「人さまに相談して褒められたのは初めて。つまり『がんばってね』ではなく、『がんばっているね』ですね。と明るく言って、第二幕の幕引きになりました。

第三幕は、ゴールデンウィークも最後の日曜日、C家のお母さんによる、「プラス発想」実践の大団円の結果報告でした。

息子が野球への夢を捨てきれずにいること、夫は正社員に伍してがんばっていることについては、「なるほど」と思い、そのまま自分の言葉として、ふたりに告げ「ゴールデンウィークは我が家の野球週間にしよう」と提案しました。ふたりは大喜びで賛成し実行に移されました。とは言っても、近くの公園で、父と子はボールを投げ合い、私と娘は、専ら球拾いでしたが、それが何とも楽しく、家族をひとつにまとめてくれました。これが「プラス発想」だと身を以って学んだ思いがしています、と明るい声で、三幕におよぶ相談はめでたく幕引きとなりました。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時

相談担当 榎場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報厳正に取り扱います

〈地域の安心システム〉★新1年生が陥り易い戸惑いや悩みの兆候を見逃すことなく、「子どもの悩みは自分の悩み」とばかりに機敏に行動する母性愛、家族の危機管理の手本のような光景です。★電話相談の利点とは？ 第1に匿名性。誰しも心の悩みを他人に知られたくないもの。第2に相談員の力量を試せること。期待外れであればそこで打ち切り。第3に信頼できると確信した段階で次に進めること。複数回の相談を重ねてハッピーエンドに至る事例の多くがこんな展開をたどります。★誰かに相談できる環境をつくる（安心できる場所、相談できる人、支えてくれる人）。この電話相談室もその一つです（h）。

独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業